

HUB-IBARAKI ART PROJECT 2018-2019

冬木 遼太郎 作品《突然の風景》発表のご案内

5月26日（日）@茨木市中央公園 北グラウンド

3月29日(金)より茨木市内各所で開催中の「HUB-IBARAKI ART PROJECT 2018-2019」では、本プロジェクトのメインプログラムとなる、冬木 遼太郎の作品《突然の風景》を、5月26日(日)に茨木市中心部の茨木市中央公園 北グラウンドにて発表いたします。

つきましては、本プログラムの周知にご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。また、当日の取材をご希望の際は、下記お問い合わせ先までご連絡くださいませ。

【開催概要】

発表日時 | 2019年5月26日（日）13:00—13:10、15:00—15:10、17:00—17:10

※ 各回とも同じ内容を発表します。

※ 当日の天候により、発表時間が変更する場合がございます。荒天中止。

会場 | 茨木市中央公園 北グラウンド（茨木市駅前4丁目8 元茨木市市民会館北東側）

[アクセス] JR茨木駅、阪急茨木市駅より徒歩約10分。お車でお越しの際は、中央公園駐車場（有料）をご利用ください。

入場無料

主催 | 茨木市、アートを活用したまちづくり推進事業『HUB-IBARAKI ART』実行委員会

公式サイト | <https://www.hub-ibaraki-art.com/>

本件に関するお問い合わせ、取材依頼：茨木市市民文化部文化振興課 [担当：川崎（かわさき）]

Tel：072-620-1810 E-mail：bunkashinkou@city.ibaraki.lg.jp

567-8505 大阪府茨木市駅前3丁目8-13 茨木市役所南館8階



冬木 遼太郎《突然の風景》のためのイメージ模型



会場の茨木市中央公園北グラウンド

発表作品《突然の風景》について

今年のHUB-IBARAKIの主軸となる冬木 遼太郎の作品《突然の風景 (Sudden View)》は、公共空間での作品発表として極めて特殊な形式の作品です。グラウンドに集まった16台の車に1音ずつ音階が設定されたクラクションの音があてがわれ、それらで1つの音楽を演奏するというものです。

《突然の風景》は、「公共／パブリック」をコンセプトの中心に、作品の発表環境やクラクションへの固定観念を介して、公共の場での人のコミュニケーションのあり方について、各々が思いを巡らせる機会となることを狙いにしています。また、昨年茨木市は、地震と台風の2つの自然災害に見舞われました。昨年の地震からまもなく1年を迎えるこの時期に、この作品を発表することも、作品の鑑賞体験に関わる1つの大切な要素でもあります。

この《突然の風景》の発表に向けて、会期スタート時の3月末から茨木市内で様々な活動をしている市民の方々とお会いして、多くの対話を重ねてきました。作品が特殊な発表形態であることから、その意図を伝え理解を深めていただくと共に、発表当日のためのあらゆるご協力をお願いする動きを断続的に実施しました。さらに会場の近隣住民への当日のご案内も、プロジェクトの活動の一つとしておこなっています。

この発表前の一連の活動を通じて、市民の方々から茨木市への思いやエピソードをたくさんお聞きすることができました。《突然の風景》は、ただ作品としての形式で成り立つだけでなく、コミュニケーションのための媒体としての役割も担っています。5月26日の作品発表がきっかけとなり、茨木について、そして私たちの日常について、さらに様々な対話と議論が生まれていくことを願います。

[制作協力]

技術制作 | 米子 匡司 (音楽家)

編曲 | 横山 裕一

アーカイブ映像制作 | ヤマダユウジ (映像クリエイター)

車のご提供 | 茨木市のみなさま

冬木 遼太郎 プロフィール

1984年富山県生まれ。2008年京都造形芸術大学情報デザイン学科先端アートコース卒業、2010年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了後、京都と大阪を拠点に活動している。

主な個展に「PRESIDENT」(ARTZONE・京都、2013年)、「Ryotaro Fuyuki solo exhibition」(サイギャラリー・大阪、2016年)、「A NEGATIVE EVAGINATE」(大阪府立江之子島文化芸術創造センター、2017年)、「内的相互」(ギャラリー崇仁・京都、2019年)。主なグループ展に「Making Sense Out of Nonsense」(京都芸術センター、2014年)、「Winter 2017 Residency Exhibition」(NARS Foundation・ニューヨーク、2018年)、「どこでもゲンビ2018」(広島市現代美術館、2018年)。2017年、吉野石膏美術振興財団在外研修員としてニューヨークに滞在。

作家HP：<https://ryotarofuyuki.tumblr.com/>

——最初に浮かんだのは「市」という単位が個々の人たちにとってどういうものであるか、ということだった。特定の地域の中で、同じ市民として生きていくとはどういうことなのか。

まず、なぜその市を住む場として選んだのか？住みやすさ、生まれた時から親がそこに住んでいたから、仕事上の理由、なんとなく、etc。

おそらく理由は様々である。そういった様々な動機でそこにいる人たちが、たまたま茨木市という単位で一緒に暮らしている。愛着がある人もいれば、ネガティブな印象を持っている人だっているだろう。

そこで自分なら何をするかを考えた時、他者と関わるのが絶対的に良いことであるとか、交流自体を強要するのではなく、自分と違う考えのとなりの人を認める行為から始まるようなことがしたいと思った。

冬木 遼太郎